

青森県立保健大学

青森県青森市

“ヒューマンケア”を身体に染み込ませ 知識と技術を備えた専門家を地域に帰す

1999年に創立された青森県立保健大学。看護学科、理学療法学科、社会福祉学科に2008年4月、新たに栄養学科が加わった。北東北唯一の管理栄養士養成校とあって、県内外から多数の志願者が集まっている。



↑外光がたふふりと入る食堂。昼を過ぎると、自習する学生たちが多い。

↑ネイティブスピーカーの教員との英会話クラス。英語が苦手な学生は単語をつなぎ合わせて伝えようとする。

「講義が終わって、ほっと息。このときは夏休みの過ごし方が話題に。」



「うまく英語が通じなくても、なんとか伝わりたうれしくなる。みんな失敗を恐れず、どんどん話す。」



「教科書では得られない、臨床現場での経験談に学生たちは興味津々の様子。『興味のある分野の授業になると目の輝きがちがいます』と齋藤氏。」



↑人間と向き合い、社会に貢献できる実践者を育てていきたい。栄養学科長の吉池信男教授。



↑「先生方はとても熱心で、わかるまで説明してくれます」と授業後に齋藤氏のもと質問に来た学生。



↑↑↑附属図書館では、夜遅くまで勉強している学生も多い。取材日は、期末テスト前とあって、わからないところを学生同士で教えあう姿も。



シオンもするフィールドワークは1年次の必修科目。この授業は、地域への理解を深めるきっかけとなっている。また、国際理解にも力を入れており、ネイティブスピーカーによる英語教育や海外短期研修制度なども充実している。英語の授業中、学生たちは、片言の英語と身振り手振りでなんとか、言いたいことを伝えようとする。なかには、うまく伝わらないことにやきもきしたのか、日本語をひと言、ふた言しゃべってしまう学生も。さすが、先生から『Don't speak Japanese...』とやさしく注意が飛ぶ。ここでは、単に語学の習得をめざすのではなく、言語がうまく通じない相手とのコミュニケーションのなかで、話し手の主張をいかに読み取り、どのように自分の思いを伝えるかを学ぶことも目的だ。

同学科1学年の定員は、30人と少人数。専門科目の授業中、学生たちの表情はとても真剣で、少しでも知識を吸収しようと食い入るように先生の話を聞く。クラス全員の前で発言することに、少し遠慮がちなるところもあるが、1人が口火を切ると次々と質問が飛び交う場面もあった。「臨床で必要な知識や技術を身につけることはもちろん、管理栄養士の視点として給食経営管理も考えてほしい。その両方がそろって初めて、『ヒューマンケア』をトータルに考えられると思うのです」と長年、医療の現場で患者と接してきた齋藤長徳講師。臨床現場で経験した、教科書どおりにはいかない難しい症例などにも触れながら、管理栄養士にとってのヒューマンケアとは何かを学生たちに伝えている。

第1期生は、現在2年次。学生たちは、授業や実験の意味を理解し、管理栄養士とはどんな職種なのかを具体的にイメージできるようになっているところだ。来年は臨床実習が控えており、再来年には国家試験と、夢を実現するための大きな試練が待っている。

高度なチーム医療の準備を1年次から

「医療の現場で働き、他職種と対等に議論したい」「生まれ故郷の青森で、たくさんの人たちに栄養の大切さを伝えたい」。目を輝かせながら将来の夢について話してくれたのは、青森県立保健大学健康科学部栄養学科の学生たち。彼らは、昨年入学した栄養学科の第1期生だ。

同大学は北東北地方に唯一の管理栄養士養成校とあって、青森県のほか、北海道や秋田県、岩手県や長野県など、県内外から優秀な学生が集まっている。その多くが、将来は医療の現場で人の役に立ちたいという強い思いを入学当初から抱いている。

カリキュラムには、学科間の垣根がほとんどない。将来の高度なチーム医療と多職種間の強固な連携を実現させるためだ。また授業をとおして、「人間とは何か?」を深く考えていき、人としてもつべき人間の根幹の部分を学生時代にしっかりとつかんでもらう。こうして、病气や障がいをもった人に対して、思いやりをもって接する『ヒューマンケア』の基礎を身につける。

学生たちの将来について、栄養学科長の吉池信男先生は、「管理栄養士の活躍分野は幅広いが、どこにいても対象となるのは人間。傷病者や半健康人、健康な人、そして医師やコメディカルなど、さまざまな人に対し正面から向き合える専門家になってほしい」と成長を見守る。

地域への貢献と国際化をめざす

全国平均を上回る早さで高齢化が進む青森県。地域の気候や風土、社会情勢や文化、生活習慣を理解しながら県民に貢献できる人材を輩出していくことも同大学の役割だ。地域の中で医療・保健に関する活動をしている人にインタビューを行ない、レポートを作成、ディスカッションもするフィールドワークは1年次の必修科目。この授業は、地域への理解を深めるきっかけとなっている。また、国際理解にも力を入れており、ネイティブスピーカーによる英語教育や海外短期研修制度なども充実している。英語の授業中、学生たちは、片言の英語と身振り手振りでなんとか、言いたいことを伝えようとする。なかには、うまく伝わらないことにやきもきしたのか、日本語をひと言、ふた言しゃべってしまう学生も。さすが、先生から『Don't speak Japanese...』とやさしく注意が飛ぶ。ここでは、単に語学の習得をめざすのではなく、言語がうまく通じない相手とのコミュニケーションのなかで、話し手の主張をいかに読み取り、どのように自分の思いを伝えるかを学ぶことも目的だ。